

RITA

教育を変える

利他の心で

中身がぶち壊れる

vol.

14

EMPATHY

VISION

PROJECT

海外留学のレシピ

主体的・社会的な進路開拓

利他のDNAを
世界へ、
そして未来へ

R
RITSUMEIKAN

リタ
ラボ
RITA
LABO



海外留学の

「修羅場」で育つ

主体性・社会性。

日本の若者は自己肯定感が低く、内向きになっていると言われる中で、

海外留学を選択する若者たちがいます。今号の巻頭対談では、

物見遊山ではない本気の海外留学を支援する2つの団体のリーダーにお話を伺いました。

取材・文／金井文宏 梶原千歳（本誌）

トビタテ

留フエロ

荒畦 悟

文部科学省
官民協働海外留学創出プロジェクト
「トビタテ！留学JAPAN」
プロジェクトマネジャー

高島峻輔

NPO 法人
グローバルな学びのコミュニティ・
留学フロンティア代表理事
ハーバード大学4年生



意欲ある若者を応援する
官民協働プロジェクト。

——「トビタテ！留学JAPAN」では、
海外留学をどのように捉えていますか？

荒畦 このプロジェクトが立ち上がった
2013年頃、グローバル化が加速度的
に進んでいる一方で、日本からの高等教育
機関への単位を伴う海外留学生者は減少
していました。そこで文科省主導による
官民共働のオール・ジャパンで、奨学金に
よって日本の若者を海外に送り出す「ト
ビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラ
ム」(以下、トビタテ)を立ち上げました。
「意欲ある若者が海外へ飛び立てるよう
に」と、1万人のロールモデルを海外に送
り出すために始まったもので、新しい留

学の形を提案するフラッグシップ・プログ
ラムです。トビタテでは、帰国した人た
ちがエバンジェリスト(伝道師)として海
外へ飛び立つ価値を全国に広めていきま
す。2014〜2020年までの7年間で
大学生5630人、高校生2685人
を採択しました。原資となるお金は税金
を一切使わず、民間の249社・団体から
約120億円の寄付を集めて運営してい
ます。

このプログラムは学生自ら主体的に留
学計画を作れることが一番の特徴です。こ
れは寄付だからできることで、税金では
公平性や質の担保の問題などが出てきま
す。行き先も自由、期間も大学生は1ヶ
月〜2年、高校生は14日〜1年の間で選
べます。

本当に自分が興味のあるテーマで留学
できるのも特徴です。大学生については
留学先で必ず実践活動をするようになっ
ていて、インターンシップやボランティア、
フィールドワークを現地で行います。高
校生は必須ではありませんが、テーマに
基づいた自主的な活動は推奨されており、
例えばスーパールの店頭でインタビューを
行ったり、日本文化を発信するイベント
を開いたりしています。学生二人ひとりに
実際の社会からリアルなフィードバックを
もらえる経験は何かを考え、留学計画を
立ててもらっています。

トビタテにどのような価値があったの
かについて、昨年春に大学を対象に大規
模なアンケート調査を実施したのですが、
一番の価値はやはり自分で計画が作れる

こと、2番目は実践活動の内容が他とは
違うところ、3番目は事前・事後研修が
あることでした。事前研修では留学の目
的を明確化して自分の軸を見つめ直して
計画をブラッシュアップしてもらいます。
留学後の事後研修は特に大事で、インパ
クトが大きいからこそ自分の中で咀嚼で
きないことを、みんなで振り返り、棚卸
して新たな目標を目指すようにします。
学生間の信頼関係をつくった上で切磋
琢磨し、コレクティブ・ジニアスと言わ
れる集合知で社会の課題を解決していく
ため、トビタテでは多様な人を募集して
世界へ送り出しています。この「つながり」
を絶やさないように、帰国後にしっかり
とコミュニティをつくっています。

キーワードは 学生たちの「主体性」。

——一方の留学フェローシップにはどのような特性がありますか？

高島 グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップ（以下、留フェロ）は、日本の高校から海外大学に進学した大学生、彼らを応援してきた高校や大学の教員で運営しているNPO法人です。ミッションは、海外進学を切り口に主体的に学びをデザインし、その学びを通じて世界の課題を解決する人を育てることです。

日本の高校から海外大学へ進学する人は、まだとても少ないんです。海外進学が根付いていない地方の高校にフォーカスして、生まれ育った場所に関わらず主体的に学び続ける人を、特に「実現したい学びのために留学が必要だ」という人を支援しています。

海外進学を切り口とするのには、3つの理由があります。1つ目に、海外進学の出願プロセスに主体性が欠かせないから。特にアメリカの大学受験では受験生の多面的評価を重視します。単に成績が良いだけではなく、自分は大学で何を学ぶために、どのように大学を使いたいのか、そもそも自分はどんな人なのかと、自分と徹底的に向き合うことが求められます。

2つ目に、入学後も自分で学びをデザインすることが求められるから。多くの海外大学では必修の授業が少なく、毎学期のカリキュラムを自分で組めます。特にアメリカでは学部を決めずに入学するのが一

般的で、多様な学問を学び、その中から専攻を決めることができます。日々の授業でも予習した上で自らの考えを発表するなど、徹底的に主体性が求められます。

3つ目に、あえて海外に出るには主体的な決断が必要だから。これが最も大事で、悩みながら海外進学に挑戦した経験を率直に話そうからこそ、海外に行ったことのない地方の生徒にも共感を呼ぶのだと思います。多くの学生は反対されながらも周りを説得し奨学金も得て、最後は周りを巻き込んで海外へ飛び立ちました。あえて海外大学に行くという挑戦は、地元を出て大学進学する高校生の決断にも通じるものがあります。

学位取得を目指す留学では一定の英語力や学力が必要ですが、留フェロのコミュニティの一番の特徴は、自分で選んで勉強している学問が本当に好きな人が集まっているということです。自分の学ぶ学問が本当に好きだから、分野が違っても会話が盛り上がる。これは大学の寮生活でも同じなんです。深夜に食堂で勉強していると、異なる分野を学ぶ学生が話しかけてきてくれる。そこから議論に発展したり、一緒にプロジェクトを始めることになったり。好きだからここまで盛り上がるんだろなああいつも思っています。

荒畦 トビタテと留フェロの共通点は、主体性がキーワードになっていることだと思います。トビタテは語学力や成績を不問にしています。好奇心、情熱、独自性を大事にして、想いがあれば採用します。これは、従来の日本の教育の評価指標で

はない評価です。才能は全国にあると思っています。トビタテの大学生コースには多様な人材コースというのがあり、そこへ一番多くの応募が寄せられます。

どちらも留学という手段を使って全国から想いがある若者をあぶり出し、海外での「修羅場」体験やアウェイ体験を通じて、成長や新しい自己理解を深める体験を提供しているのです。

——例えばどんな「修羅場」体験があるのでしょうか？

荒畦 留学先は、大学や教育機関に限定してないので、トビタテのプログラムでは「修羅場」が頻発します。部屋を見つけていることにすら苦戦したり、突然インターンシップ先が潰れたり、予期せぬことも起こります。学生たちは自分でつくった計画と宣言で海外へ行きます。トラブルがあっても何とか奮闘して解を見つけて、正解のないチャレンジをしなければいけない環境に追いつ込まれます。あえて王道から外れる、頭で考えたらそれってリスクじゃないかという道であえて課題解決する。あるいは買ければ避けるような選択肢を選ぶ。予期しなかったことに対応する中で、新しい力に気づくことができそうです。そして、周りにサポートされていることが分かり、感謝の気持ちが湧いてくるのです。

——今後の展望を教えてください。

荒畦 トビタテの第1フェーズである2021年までは、若者の留学を多様化することによる留学機運醸成をミッションに挑戦してきました。次のフェーズとして

は、留学した若者が全世代と協働しながらリーダーシップを発揮して、活躍する社会をつくり出していくことです。

エッジの立った約1万人のトビタテ奨学生と日本の産業界に影響力のある支援企業がさらに手を取り合い、新しい若者の活躍の場を生み出していきたい。そして、ロールモデルをどんどん示していきたいと思っています。留学を引き続き支援しつつ、留学を経験した若者が成果を出せる、成果を社会に還元できるような仕組みづくりに力を入れていきます。協働による創造と社会の変革です。

高島 留フェロができて7年。これまで全国で活動する中で、海外進学を切り口に進路を考えるプロセスやそのモデルが少しずつ見えてきました。中でも、育った学習環境やコミュニティが主体的な進路選択という挑戦に与える影響が非常に大きいことがわかりました。これは海外進学を目指す人のみに当てはまるものではありません。

今後は公教育に対するアプローチを強化します。まずは高校時代に自分の学びをデザインできる人を育てたい。2021年度は教育委員会と連携して地方の公立高校向けの長期プログラムを始めます。その後は日本の大学でも自分らしく学び続けることができる環境を整えていきます。一人ひとりの主体的な進路選択を応援するとともに、彼らが活躍できる環境をつくる。僕たちも引き続き主体的に頑張ります。

留フェロと出会い、情報や機会が 平等に行き渡る社会を目指す。

幸田 優衣

Kouda Yui

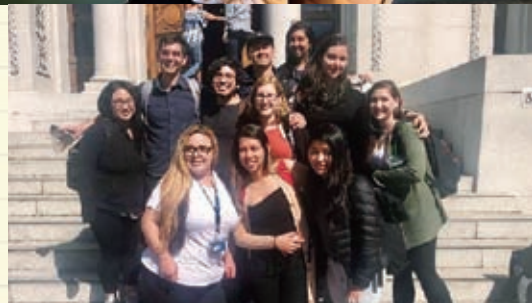
アメリカ | カリフォルニア大学バークレー校 社会学専攻 卒業
新潟県出身・県立燕中等教育学校

ビッグデータと
社会学の関連性を
発見!!

新潟の田舎に住む高校3年生の私は、パソコンの画面越しに格差を目の当たりにしていました。海外進学を決意した私は、受験準備をするためにオンラインの塾に通っていました。そこで出会った同じ志を持つ子たちは、全員首都圏に住んでいて私より年下でした。そして彼らは遅くとも高校1年生の頃には海外進学について考え始め、相談できる人も周りにいて、この塾の他にもオンラインの海外進学塾に通っていました。



上／シリコンバレーの
スタートアップにて、
右／クラスメイトと一緒に



ライン塾をネットで探し、募にもする思いでYahoo!知恵袋で海外進学の相談をしていました。首都圏と地方でこんなにも環境が違うのかという純粋な衝撃と、社会の不等等さに対する憤りを6年経った今でも鮮明に覚えています。

私が社会学を学ぼうと思ったのはこの経験がきっかけでした。置かれた環境に関係なく情報や機会が平等に人々に行き渡る社会を実現したいという思いを胸に、著名な社会学教授や社会的マイノリティの学生が多く集まるカリフォルニア大学バークレー校（UCバークレー）で社会学を学ぶことを決意しました。

社会学の授業では、元受刑者やシ

ングルマザー、私の祖母と同世代の学生など、多様なバックグラウンドを持つクラスメイトが集まっており、彼らとの議論を通じ社会を多角的に観察できるようになることに楽しさを感じていました。そして、社会学から得る学びを通じて理想とする社会の実現に着実に近づいている気がしていました。

3年目の夏、大学での学びを社会で活用する機会がほしいと思っていたところ、理念に強く共感するNPO団体に出会いました。グローバルな学びのコミュニティ・留学フェロシップ（留フェロ）です。

日本全国の教育機関を訪問し、中高生に進路に関する情報提供を行いつつ、生徒一人ひとりとっての主体的な進路選択について考える機会を提供する活動は、まさに私にぴったりなものでした。自分と同じように情報や機会が不十分なことから進路に悩む子を1人でも減らせたという思いで個々の生徒と向き合い、理想とする社会の実現に向けて一歩近づけたような手応えを感じていました。

ここでの経験を通じて、今までの社会学中心の学びだけでは大きな変化を生み出せないかもしれないと思いました。私はかねてから、オンライン上で進路や留学に関する情報発

信をしたり、周囲の進路相談に乗ったりしていました。しかし、それらと留フェロの間には大きな差があることに気づきました。

留フェロには理想とする社会に対する強い気持ちだけでなく、効果的に社会に発信し、変化を起こすためのノウハウがあるのに対して、私は社会への強い気持ちを最大限に活かせるようなスキルセットに欠けていたということ。もちろん、熱意が根底にあるのが大前提ですが、それを最大限に活かせるスキルやノウハウがほしいと気づいたのです。

夏休みが明け、これまでの社会学中心の学びのスタイルから、社会に対する思いを効果的に発信できるような学びが得られる授業を取るようになりました。まず受講したのは、消費者心理の授業。留フェロでの活動中、自分の思いが一方通行で生徒に上手く伝わってないのではと不安に感じる事が多々ありました。消費者の心理を意識したメッセージの伝え方について理解を深めることにより、ターゲットは違えど効果的なコミュニケーションのヒントが得られるのではないかと考えたのです。

大学4年生になる頃、所属していた学生団体の代表を務めることになりました。周囲に指示を出すことが多く、自分のメッセージを伝えるだ

けでなく、周囲に動いてもらう必要があったため、これはまさに学んだことを試す時だと感じました。まだ課題を感じることもありましたが、意見を伝える前に相手がどんな人かを知ろうとしていた自分に大きな成長を感じ、目標達成に向けてまた一歩近づいたと感じました。

しかし、そう感じたと同時に再び自分に足りないものに気づいたので、それはチームのあり方について。私が所属していた学生団体は優秀な人が集まっていたが、チーム間での共通認識や文化が確立されておらず、個人として発揮できる以上の力をチームとして発揮することができていませんでした。そこで、今度は共通のゴールに対して効果的に協働して取り組めるチームづくりのヒントを得るため、世の中に存在する組織がどのように組織内外から影響

を受け組織内の文化が形成されているのかについて学べる組織論の授業を履修しました。

大きな変化を起こすためには熱意だけでなく、熱意を使いこなすための学びも重要だという気づきを経て、社会学の知識や社会に対する思いを上手くアウトプットできるようになりました。授業で得た学びをもとに日々の生活を送ることで、自分に欠けているものに気づき、新たな学びを授業によって得る。そして授業で得た新たな学びを社会に発信することさらに学びを深める。そんなインプットとアウトプットのサイクルを繰り返していました。

卒業に近づく頃、新たなインプットとアウトプットの場として、シリコンバレーのITスタートアップでコンサルタントとして就職することを決めました。ITという分野で世界中の情報をつなぐテクノロジーについて学び、スタートアップという環境で限られたリソースの中で最大の価値を創造するためのノウハウを学び、コンサルタントという職業を通じて課題解決のアプローチを学ぶことができる場です。

置かれた環境に関係なく情報や機会が平等に人々へ行き渡る社会を実現するという目標を達成するた

めに必要な学びが、ここで得られると感じました。今までの学びを生かせることも、選んだ理由の一つです。社会学や消費者心理はクライアントの置かれた環境やニーズを把握する必要があるコンサルティング業務において、組織論はスタートアップのエコロジーを理解することにおいてそれぞれ有用であり、大学での学びを次は企業という環境でさらに深められることを期待しています。

パソコンの画面越しに社会の不平等さに憤りを感じた時からすでに6年。情報や機会が平等に行き渡る社会を実現するという目標とは一見関係がないような学びや経験も得てきました。しかし、私の中でそれは目標へのアプローチが変化しただけに過ぎず、社会学や消費者心理、ITスタートアップなどの学びから枝を増やすことで、着実に目標達成への幹を伸ばしてこれたと感じています。6年前に感じた社会に対する強い気持ちを大切に、今後も様々な学びをもとに目標達成に向かって取り組んでいきます。

高校生の進路選択をサポートする(留フェロ)。



memo

高3で初めて海外進学という選択肢を知り、コミュニティ・カレッジを経てUCバークレーに編入。「理想の社会の実現」をテーマに学びの場を広げている。

「理系女子の優等生」レッテルから、 多様な「私」へ。

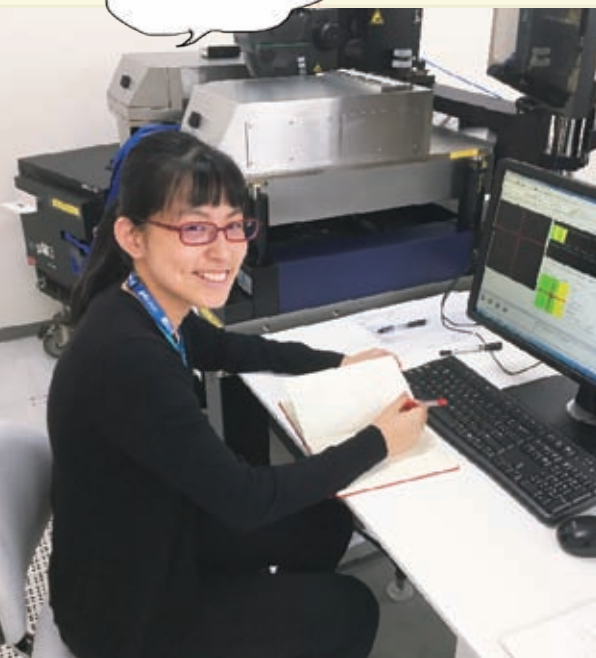
森本 優貴美

Morimoto Yukimi

アメリカ | マサチューセッツ工科大学 電子工学専攻 卒業

熊本県出身・県立熊本高等学校

多くの人が使う
製品に関わるって
ワクワクする！



半導体メーカーでのインターンシップ。

時刻は午前3時。マサチューセッツ工科大学（MIT）史上初のオンライン卒業式。大学を卒業する瞬間ですが、熊本県の自分の部屋で一人パソコンを開いていると、中高生時代に戻ったかのようです。

思い返せば、昔からのものづくりが好きでした。幼稚園の時から大好きだった工作。小学生の時に参加していた博物館での工作教室や科学教室。中学生の時に部活で出場したロボットコンテスト。高校生の時に九州大学で参加した高校生のための研究プログラム。自分の手で何かを作ることがとにかく好きでした。そして、自分から外に出て何かにチャレンジすることも好きでした。MIT

進学もその延長線上にありました。

私の住む熊本では県主催の無料の海外進学や留学のための講座がありました。もともと英語は好きだったので、海外留学や進学にも興味があり、参加し始めました。講座を通して英語の勉強以外にも、留フェロで海外大学進学した日本人学生と話したり、受験や奨学金の制度や準備について学んだりもできました。そうするうちに、海外進学もチャレンジできる範囲内のものだとわかりました。たくさんの方々のサポートを受け、MITに進学しました。

入学すると、MITは私にとってとても居心地の良い場所でした。高校時代まで気づけば周りは男子ばかりで、「男子よりよくやらない」という謎のプレッシャーを常にかけていました。また、地元でずっといわゆる「できる子」だった私は、周りの期待に応える方が楽で、本来の自分ではない別の姿を自ら演出していると感じることも度々ありました。

MITは工科大学ながら学部生が男女半々で、バックグラウンドも実に様々です。その多様性の中でも、みんな授業や趣味でのものづくりや研究に情熱を燃やしていて、一体感というのもありました。それだけではなく、科学以外にも同じくらい情熱を持っている人がたくさんいて、音楽やゲーム、語学など、分野を問わず極めていく人がたくさんいました。私はMITで初めて本当の意味で自分が解放されたと思います。自分自身の工学や英語以外の興味や自分の個性を認めることができるようになった。自分が極めたもののづくりのために、自分の他の側面や価値観を無視することを止められるようになりました。そして、自分が

memo
県立熊本高校在学中に県主催「海外チャレンジ塾」のサポートを受け、地方・純ジャパでMITへ進学。MIT奨学金と江副記念リクルート財団奨学金を利用して学んだ。

どのように生きていきたいのか、仕事やそれ以外についても、自分に素直に考えられるようになりました。

学術的には、大学では面白そうなことが多すぎて選ぶのに困ってしまっただけでした。その中でも、学部生活のハイライトの一つはやはり研究です。学部1年生のとき、UROPという学部生の研究制度を使って研究を開始しました。高校生の頃、九州大学のプログラムで材料工学（特に超伝導材料）の研究をしていたこともあり、超伝導のナノワイヤーで光子一つひとつを検知するデバイスの研究を行うことにしました。

学部1年生では他にも大学院生の手伝いをしながら理論や実験について学びました。学部2年生ではデバイスに使う材料について文献と実験から調べ、材料の最適化を行いました。

学部生活のもう一つのハイライトは、個人やグループでの設計や製作のプロジェクトの授業でした。電子ピアノ、温度センサー、ハードウェアセキュリティを考慮した回路などの設計や製作を行いました。そして、プロジェクトの授業ではレポートやプレゼンをすることが非常に多く、専門的な内容をわかりやすく面白くアウトプットしていく技術も学びました。こうした大学での学びの中でのづくりや研究開発の楽しさを改めて感じました。

しかし、学びの場は大学だけではなく、3年生の夏に日本国内の2つの会社でインターンシップをしました。1つは総合電機メーカーで2ヶ月間、MRIに使うための超伝導コイルのシミュ

デバイスに使用する超伝導薄膜を作成中



た。学部3年生ではデバイスの設計を行い、実際にナノレベル、マイクロレベルのデバイスを製作したりデバイスのテストをしたりしました。学部4年生で追加実験と論文執筆を行いました。

この研究の醍醐味は必ず、誰かが作ったものを組み合わせるだけでなく、まだ誰も作ったことがないものを一から作っていったことです。デバイスに使う材料から、設計、製作まですべてを自分で行うという貴重な経験をしました。

学部生活のもう一つのハイライトは、個人やグループでの設計や製作のプロジェクトの授業でした。電子ピアノ、温度センサー、ハードウェアセキュリティを考慮した回路などの設計や製作を行いました。そして、プロジェクトの授業ではレポートやプレゼンをすることが非常に多く、専門的な内容をわかりやすく面白くアウトプットしていく技術も学びました。こうした大学での学びの中でのづくりや研究開発の楽しさを改めて感じました。

しかし、学びの場は大学だけではなく、3年生の夏に日本国内の2つの会社でインターンシップをしました。1つは総合電機メーカーで2ヶ月間、MRIに使うための超伝導コイルのシミュ

レーションを行いました。もう1つは半導体メーカーで1ヶ月間、メモリ製品のウェハーの評価分析を行いました。企業で働くことはもちろん、熊本より都会と田舎の両方に住む体験もできました。どちらのインターンシップも、授業や研究で学んできた知識や技能がそのまま生かせる業務で、なおかつ製品に直結した業務でした。



ベアで一から手作した電子ピアノ

そして、思わぬ発見がありました。私は、人が実際に使う製品に関わることにとてもワクワクしていたのです。いつか運が良ければ誰かの役に立つかもしれない研究よりも、数年後にたくさんの人に役に立つ製品に関わることをの方が、私にとってはやりがいを感じる経験でした。自分が好きなものはものづくりそのものの楽しさだけではなく、そのものづくりの先にある人の笑顔だと気づきました。

大学へ入る前、漠然と自分は博士課程まで行って大学の研究者を目指すのだろうか、そして、それが「正しい」道なのだろうなと思っていた。周りの多くの人々も私にそういう期待を寄せているのを感じてきました。しかし、インターンの経験を経て、修士課程修了後は大学ではなく企業で研究開発の仕事をしたい、ひとまず日本で働きたいと思うようになりました。これも、大学で自分の思考が自由になったからこそ

の選択だと思っています。

昨年5月に学部を卒業し、現在は引き続きMITで修士課程に在学しています。超伝導デバイスの研究は論文発表で区切りがついたことと、全く違うことを学びたいという気持ちで、研究室を移りました。現在は、量子コンピューターに使用する低温CMOS回路の研究を行っています。大学で過ごす最後の1年、コロナの閉塞的な雰囲気にならず、大学ならではの学びや楽しさを存分に味わい続けたいです。

MITで得た一番大事なもの仲間たち

学生寮の仲間たちと



二元論からの脱却。

片山晴菜

Katayama Haruna

アメリカ | ミネルバ大学 経営学・認知科学専攻

北海道出身・UWC USA

90分を通して
ディスカッションで
進む授業は常に気が
抜けません！



ロンドンにてカフェで授業を受ける。

TwitterやUberの本部まで、寮から徒歩1分。Patagoniaのダウンベストか企業バーカーしか着てはいけないとのルールでもあるのだろうか。アップルウォッチで会計を済ませたばかりのホットコーヒーを片手に、おそろいの制服に身を包んだ集団は、いつも早足でどこかに向かっていた。大学1年目、2017〜2018年のサンフランシスコのテック界隈の機嫌はビットコインの機微に左右されているようにも窺えて、米国の中でも独特な空気を放っていた。

サンフランシスコやその周辺のベイエリアの多くの人にとっては「富の蓄積」こそがアメリカン・ドリームと捉えられていて、街は野望を抱える人々の活気にぎわっていた。

ミネルバ大学の学生も、毎週のようにテック企業後援のハッカソン（技術者が一定時間缶詰めになってソフトウェア開発などのアイデアを競い合う催し）に出向いては、お題に沿ったプロダクト・プロトタイプを作って賞金を持って帰って来たり、私も後からそれに加わった。

所変わリ、ベルリン。国会議事堂前の芝生では、週末の日差しを求めて、学生や犬を連れた家族がピクニックをしている。日が暮れてきたので、街のキヨスクの前のベンチでホットワインを飲んでいると、地元

れた、という目をする。

少し間を置いて、そのうちの一人が「毎日を幸せに生きること」と言う、皆が頷いた。「僕らはアーティストだけど、誰かのために披露するために演奏しているわけじゃないんだ。好きだからやっている」と続けた。その次に移り住んだアルゼンチン、ブエノスアイレスでも同様の反応を得た。平日でも午後4時頃になると仕事からささと引き上げ、行きつけのカフェやワインバーのテラスで馴染みの顔との時間を過ごす。長期的な野望こそないものの、どちらの都市の住人も、「日々の暮らしの質を向上させること」を究極の幸せと捉えているようだった。

ミネルバ大学にはキャンパスがない。今のところ、これといった部活動もない。その代わり、学生は学期ごとに違う国に移り住み、知識の応用を通して街と繋がることで、世界中の都市を学びの場として自由に活用する。もちろん、教室と実社会の繋がりを意識して設計したカリキュラムも用意されている。

ちょうどサンフランシスコで複雑系の授業を受講していた期間に、ホームレスの住民と交流する中で、低所得者向けの住宅問題の複雑さを肌で感じる機会があった。当時は産学連携プロジェクトの一環として、



セクシャルウェルネス関連のイベントにて。

ソーシャルコンサルティング企業の Dalberg にて、市内の低所得者層の食料安全保障の向上についてリサーチをしていたが、住宅問題への理解なしには、複雑に連鎖する社会課題にはアプローチできなかっただろう。

インド滞在中に受講していたグローバルビジネスの授業では、所得底辺層向けにシャンプーを普及させた販売戦略などに触れ、実際に小売店を訪問する度に教室での学びと実世界がリンクする瞬間が何度もあった。

韓国・ソウルでは、カカオトークで有名なカカオコップのCS部門が全社的な社会貢献の取り組みとして進めていたプロダクトの開発を手伝った。社会的動機に関するリサーチとそれらのゲーミフィケーションを担当して、当初のアプリの構想と全く異なるコンセプトを提供し、それが認められた時は、新しいもの

を創り出す喜びを得たのも記憶に新しい。授業で学んだ概念や知識を実際の社会に還元できると実感できたことで、日々の学びにより一層身を入れて向かい合おうと思い直すきっかけにもなった。

ミネルバ大学には、認知ツールと基礎概念を80のスキルに体系化した「思考習慣と基礎概念」という、4年間を通した評価の基軸がある。学生はこれらを繰り返し異なる文脈で応用することで、意識せずとも使えるように訓練を重ねてきた。これらが日々の学びや、産学連携のプロジェクトやインターンシップに生きるというのは、彼らの計算の範囲内で、個人的な実用例も枚挙にいとまがない。しかし、あえて私が強調したいのは、多様な生き方・働き方との出会い、そして大学で鍛えられた思考回路は「自分の人生をデザインする」上でも非常に有効であるということだ。

キャンパスを持たず、世界6ヶ国に移り住む中で「学校IIテスト、教室IIキャンパス、授業II先生が教える」といった当たり前が、いかに今までの教育のあり方をむしろ疑ったのか痛感する経験が多々あった。当たり前を疑うという考え方は、先述の欧米の価値観を比較する上でも役に立つ。



アルゼンチンで行われた中絶デモ。

富の蓄積に重きを置く、野心あふれたアメリカン・ドリームに倣った生き方と、生き急ぐことなく今日という1日を満喫するヨーロッパや南米の価値観。そして、安定した家庭を築くといった日本の理想の家族の姿。これらの選択肢は「or」で語られるべきものではない。

既にあるものをそのままの形で取り入れるのではなく、価値観が構築されるまでに至った歴史的な背景や、それらと現代の社会状況との齟齬を考慮した上で従来の通説や文化を見直して、それぞれの良い部分を統合し、新しい解釈を加えた上で、自分なりの新たな価値観を創りあげていく。こうした作業ができるようになったのは、批判的思考と創造性を培う「脳のトレーニング」と異文化との交錯による賜物だと感じる。無意識のうちに自分へ押し付けている窮屈な「正解」から自身を解放

し、価値観を再定義するには、一定の自己認識を要するだけではなく、そのきっかけを作り、変容を促してくれる触媒の存在が鍵となる。今は、サンフランシスコからリモートで日本国内の femtech（テクノロジーで女性の健康課題を解決する）企業で市場分析や戦略策定に関わったり、業界との個人的な繋がりを駆使しながら卒業プロジェクトに励んだりする中で、セクシャルウェルネス（包括的な性の健康の向上）にまつわる分野で、新しい価値観を紡ぐきっかけづくりを手伝っている。

ゆくゆくは、ネガティブなレッテルを貼られているより広範囲のトピックにおいて、時に拮抗する価値観を俯瞰し統合するという私の強みを生かし、テクノロジーとデザインを通して価値観の解放・再定義を後押ししたいと考えている。二元論的な考え方から脱却し、より多くの人々が「住みたい日本になってきた」と思えることを願って。

memo

地元北海道の高校を退学し、経団連奨学生として米国の高校を卒業したのちミネルバ大学に進学。第1期柳井正財団奨学生および孫正義育英財団正財団生。

強い人々は強いリーダーを 必要としない。

坂内 佑太郎

Bannai Yutaro

アメリカ | ニューヨーク州立大学 黒人史専攻

新潟県出身・県立国際情報高等学校

社会を動かす
高い志と厚き人望に
感動!!

上 / 国立投票権博物館にて活動家にインタビュー

“Strong people don't need strong leaders.”

1950年代から60年代にかけてアメリカで展開された黒人公民権運動の活動家エラ・ベイカー氏が残した言葉です。数世紀以上にわたって続いた白人優位社会に抑圧された黒人たちが、カリスマ的な指導者に大きく依存している実情に警鐘を鳴らし、社会は自らの手と行動によって変えていかなければならないと訴え続けました。草の根運動や参加型民主主義の必要性を唱えたベイカー氏が目指していたのは、最も人種差別に苦しんでいた人々が自ら立ち上がることでした。

この一文を教科書の中に見つけた時、私は初めてアフリカ系アメリカ人の歴史を学ぶ自分なりの意義を見出すことができました。それまでは

ただ教科書を読み、数ページのエッセイを毎週書き続ける宿題に追われ、この学問に興味を持つ理由に真剣に向き合うことはありませんでした。しかし、高校卒業まで日本で過ごした私にとって、アメリカ社会に根強く残る人種差別への問題意識がこの学問を専攻する発端ではありながら、他人事という感覚を拭えないこともまた事実でした。

黒人史を学ぶ中で頻繁に感じていたのは、コミュニティの力強さや一体感、また市民としての自由と権利が保障された社会の実現のために、さまざまな人々を巻き込みながら着実に国を動かしていた人間の気高さでした。バラク・オバマ元大統領が国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の除幕式のスピーチの中で、「アフリカ系アメリカ人の歴史はヨー

ロッパ人やアジア人、ネイティブ・アメリカン、ラテンアメリカ人など人種の垣根を超えて、全ての人々に繋がっている」と述べたように、私にとって黒人史から導かれる教訓は、私たちが実現したい社会に向かっていくための人間的な学びでもあるのです。

その学びを深めるべく、私は大学のあるニューヨーク州から23時間かけて、公民権運動の始まりの地とも呼ばれるアラバマ州モントゴメリーとセルマを目指しました。1961年に公共交通機関における人種差別撤廃を求めた十数名の若者が、北部ワシントンD.C.から南部ニューオーリンズまでバスで目指した「フリーダム・ライダーズ」と呼ばれた運動があったことにちなみ、私もグレイハウンドという長距離バスで南部に向かいました。

中西部から南部の諸都市を訪れ、教科書の中の世界を自らの目と足で見て回りました。南部の奴隷を北部に逃亡させる手助けをした地下鉄道の主要地点となったシンシナティ。キング牧師が暗殺されたメンフィス。高圧放水と警察犬でデモ隊を抑え付けたバーミングハム。そのバーミングハム運動の中心地となったケリー・イングラム公園の周辺では、黒人の生活環境改善を訴える団体の方々数名と会話をし、公民権運動時



セルマの行進の出発点となった下マンド・ベタス橋



運動の最前衛でもあったこのラウンズ郡において、名も無き学生たちと地元の黒人住民が協力しながら不屈の精神で運動を前進させたのです。

とりわけ印象に残っているのは、

NEW SOUTH BOOKSというアフリカ系アメリカ人の歴史を専門にした独立出版社の方々やアラバマ州政府の方との夕食です。人種的な偏見や発言が多い地域で育ち、白人生徒のみの公立学校に通っていた頃のエピソード、北部から南部に引越してきた際に感じた伝統や政治色の違い、現代の大量投獄問題。さまざまなテーマで議論を交わしました。人種に関する会話が特にタブー視されている南部で実情を伺えたのは非常に良い学びでした。

南部での1週間を終え、ニューヨークへ戻るバスの車中で振り返りながら、この国を大きく揺り動かした公民権運動の中心は自らの社会を変えようとする黒人コミュニティの連帯感だと再認識しました。そうして無数の人々が暮らすアメリカの街々や平原を車窓から眺めているうちに、ふと自分が生まれ育った新潟県ではどんな地域コミュニティがあつて、どんな人々が生きているのだらうと気になり始めていました。

教科書に書き残されることは少なく、人種差別の問題意識や指導者ば

かりに注目が集まるなか、しかし確かに、黒人の一般市民が公民権運動を中心的に動かしていたように、地域課題やネガティブな側面しか知らなかった故郷にも、きっと前向きにコミュニティを活性化させようとする人々がいるはずと考えました。

結果的には、大学を休学し新潟県南魚沼市で数ヶ月のフィールドワークを行うことになるのですが、そのきっかけは宮崎県高千穂町に暮らす人々との出会いでした。消えゆく伝統文化や農法を後世に残し、魅力的な町をつくろうと信念を持って取り組む人々を知ったことで、より日本の地方への興味が高まりました。

その1ヶ月後には、学びのフィールドを高校時代を過ごした南魚沼市に移し、心が赴くままに商店街の方々や市役所の担当者、一次産業の従事者、学校関係者など100を超える方々と対話を重ねました。地域課題を挙げればきりがありません。一方、視点を変えればその課題を超えて魅力あふれる町づくりに取り組む方々もたくさんいます。

社会を切り開く答えは海外にあると信じ続けたがらも、自らのロールモデルに出会ったのは、意外にも故郷でした。海を越えた体験によって原点を知り、地域の大人が「憧れ」へと変わり、一緒に町づくりに取り

組めたことは人生のターニングポイントになりました。それ以降、島根県で日本国内の越境留学を推進する活動に携わり続けています。

淡々と教科書で読む黒人史と、自分なりの意義を持ち、現場や当時の様子を直接知った上で学ぶ黒人史では、大きな違いがあります。そして一見関係性が無いように思われるアメリカ黒人史と日本の地方の間にも、Strong Peopleという共通点がありました。

過去に生きたStrong Peopleの輝きと尊さ。各国で今を生きるStrong People。私は決心しています。近い未来、自分もそのようなStrong Peopleとして

地方の時代を切り開く人間になっ
ていきたい、と。

新潟県南魚沼市での
フィールドワークにて



memo

15才の夏に訪れたロシアの雄大さに心打たれ、将来海外で学ぶことを決意。海外進学の前例がない中、5人の同期と共にアメリカの大学に挑戦し、18才の秋に渡米。

大学は進路選択のためのプラットフォームだ。

小宮 貫太郎

K. Komiya

アメリカ | デポー大学 経済学専攻 卒業
東京都出身・都立戸山高等学校

出勤3日目に
一面記事を書かせて
もらえるとは…!



上/ジャバン・タイムズの
インターン。
左/デポー大学のキャンパス

「リベラルアーツカレッジ(LAC)は入学時に専攻を決めなくていいから、やりたいことが見つからない人におすすすめ」と、アメリカ留学志望者のコミュニティではよく言われます。学部を選んで出願する総合大学の専門課程に比べ、LACは自分の進路を柔軟に決めやすいとする説です。

しかし私は、自分の進むべき道が決まっていながら、LACであるデポー大学に進学しました。ジャーナリズムを学びたいと思っていたのです。10歳で日本の全国紙の「子ども記者団」に参加して以降、取材執筆活動は自分のライフワークだと直観していた私は、本場でこの道を極め、国際ジャーナリストになりたいと願って渡米しました。

2020年12月に3年半で早期卒

業が叶い、この春から東京で海外メディア記者として働く予定です。卒業の際には何人からも「初志貫徹で立派だね」とメッセージをもらいました。しかし、必ずしも直線的な進路を歩んできたわけではありません。紆余曲折やスランプもあったものの、今から振り返ると確かに一本の筋が通っているな、くらいの感覚なのです。

私が正規留学を決めた理由は、リベラルアーツという教育システムそのものでした。高校時代、講義を聴き板書を写すだけの授業に辟易していた私は、少人数クラスで活発に議論しながらの学びにときめきを感じ、言語の壁を超えてでもそんな大学に行きたいと思っていました。そして自己分析を重ねて前述の夢を再確認し、小規模かつ留学生への奨学

memo
純ジャバで小中高は公立校出身。国際ジャーナリストを目指し、江副記念リクルート財団の奨学金で渡米。在学中は日・米・マレーシアの5つの報道機関で取材活動を行った。

金が潤沢な中西部のLACのうち、専攻・副専攻とは違うもののメディア志望者向けプログラムのあったデポー大学を選んだのです。

中西部・インディアナ州の州都から1時間ほど離れた町にあるデポー大学は、アメリカの典型的な田舎の私立カレッジです。生徒は学部生のみ2000人ほどで、約30の専攻が用意されています。経済学を選んだのは、記者として強みとなる専門分野をつけるにあたって、つぶしのきく社会科学を学ぼうという考えから。また、2016年に公開された「パナマ文書」の影響もありました。約80ヶ国のジャーナリストが協力して世界中の権力者の不正を暴く「国際調査報道」に憧れ、その基本である「Follow the money」(カネの流れを追うこと)に精通しようと経済学専攻に決めたのです。

しかし、課程を進めリテラシーがついてくると、逆にビジネスの視点からニュースメディアの構造的な課

題に問題意識を持つようになりまし
た。学外の現場を巡って得た、さま
ざまな学びが契機になりました。

国内の英字新聞やニュース企業で
のインターンを通じて、伝統的な報
道の仕事にはいわゆる「フルシット・
ジョブ」的側面がなくもないと気
づいたこと。対照的に、後述の北京
大学でのサマースクール中に見学し

た、1日5000本の記事制作を自
動化するAIといったテクノロジーの
破壊的な力。そして何より、世界
最高峰の規模と質を誇るはずのア
メリカメディアが、ローカルニュー
スの砂漠化、そしてトランプと「ポ
スト真実時代」のメディア不信に
よって、地殻変動的な大転換期にあ
ることを授業やオンラインのジャー
ナリズム・コミュニティ、そして業
界団体のカンファレンスで知ったこ
とです。

ジャーナリズムから経済へと興味
が逆転し、2年目の後半にかけて、
メディアの構造的課題を解決するこ
うな命題に没頭していきました。プ
ロックチェーン技術でニュース流通
の制度設計を目指すベンチャーの論
文の翻訳なども手がけました。この
プロジェクトは結局失敗に終わって
しまいましたが。

折しも、いわゆるカルチャー・
ショックの4段階における幻滅期に

入り、田舎のキャンパスでの刺激の
少ない大学生生活に飽き始めた頃で
した。デポー大学に入学したことを
後悔し始め、都市部の総合大学への
編入に挑戦することを決めました。
ゲーム理論やメカニズム・デザイン
など、LACでは学べないような高
度な経済学理論に関心が芽生えたこ
とも理由の一つです。

ところが結果はすべて不合格。留
学生が奨学金付きで編入することの
ハードルがそもそも高いこともあり
ますが、一番の原因は、日々の授業
にもついていけなくなるほどの精神
的なバーンアウトで、出願書類を仕
上げられていなかったことでした。

失意の中、2年目の夏休みに入っ
てすぐ旅行に向かったタイで、私は
東南アジアの急激な変化（モビリ
ティやフィンテックを始めとするテ
クノロジー受容、勃興する地方都市
の中産階級、多様なジェンダー、表
層的にはあるが現地で感じた国内
の格差など）に心を奪われます。

「リープフロッグ（蛙飛び）現象」
というように、従来のパラダイムで
発展の遅れていた社会が最新技術に
よって一気にアップグレードするさま
は圧巻で、それはメディアにおいて
も起きると思えました。もっと学び
たいと思った私は、大学の単位互換
インターンシップ制度を活用し、休

学ではなくカリキュラムの一環とし
て、マレーシアの報道機関で3年目
の秋を過ごしました。

2020年初頭にアメリカの大学
に戻りますが、アジアへの情熱は続
きました。同年2月、ブルームバー
グ東京支局のインターン時に書いた
音声翻訳機の特集記事で、アメリカ
海外特派員クラブから日本人初の特
生賞を受賞。その受賞スピーチでも
「アジアで次世代のジャーナリズム
を目指したい」と夢を語りました。

コロナ禍中はアメリカに残りまし
た。夏から秋にかけて、ダウジョー
ンズの投資専門誌や、世界のテクノ
ロジーを扱う非営利メディアにてリ
モートでインターンを続け、危機の
時代における経済のあり方を記者と
して報じてきました。以前の活動も
合わせてみると、書いてきた英語記事は
80本近くに上ります。また、大学内
の学生新聞でもウェブサイトの刷新
やニュースレターの新設など、パン
デミックで紙媒体が休刊した中でデ
ジタル化を進めました。

卒業を迎えた今、振り返ると、学
術面では経済学専攻として主だっ
た実績を残せなかった代わりに、
ジャーナリズム分野の実践に明け暮
れた3年半でした。早期卒業を目指
していたわけはありませんが、大
学外での活動から得られる学びの方

が多かった自分にとっては、とにか
く早く社会に出る選択は間違ってい
ないと思います。

入学前に憧れていたLACの教
育スタイルは非常にやりがいがあ
り、リベラルアーツ（幅広く、時に
深い教養）も身についたと思います。
その上で、自分の進路選択をまとめ
るとすれば、「大学をプラットフォーム
として使った」ことです。やりた
いことが決まっていなくても、学外
での時間を増やすにも、あるいは学
内のリソースの活用を目指す場合で
も、個々人のその時々状況や意志
を柔軟に受け止めるカリキュラムに
参加できたことは幸運でした。

一度は他大学への編入も考えたも
のの、コロナ禍で地方生活の価値が
上がったこともあり、今はデポー大
学に進学したことを後悔していませ
ん。時節柄、卒業式はなくなってい
ましたが、ウォール・ストリート・
ジャーナル中興の祖と呼ばれた名記
者バーニー・キ
ルゴアのよう

に、デポー出身
のジャーナリス
トとしていつか
母校に錦を飾
りたいと思っ
ています。



マレーシアの報道機関にて。

自分は何のために 生きているのか。

羽鳥 静華

Hatori Shizuha

アメリカ | ウェズリアン大学 ジェンダー学・政治学専攻 卒業

茨城県出身・県立竹園高等学校



南アフリカの森にて

南アフリカのヨハネスブルクに来てから1年3ヶ月。当初は生活の隅から隅まで楽しかった。新しい場所、新しい気候、新しい家、新しい人、新しい挑戦。好奇心という好奇心をくすぐられる毎日だった。

そもそも南アフリカには仕事の関係で移った。大学を卒業してから、ワシントンDCの政治リーダーシップに特化したセメスター・スクール(二つのテーマで半年のみ学ぶ高校)で働いていたが、アメリカの「グローバル教育」の自国中心主義が抜け切れていないところに嫌気がさしていたところで、同校初のインターナショナル・プログラムを南アフリカで設立する機会をもらった。飛行機に乗るまで片道20時間かかることに気づかなかったくらい、教育に対する熱意と勢いに任せて移住した。

移住して半年くらい経った頃にコロナウイルスのパンデミックが深刻化した。

私はまだ仕事が残っていたのと日本の状況が芳しくなかったのもあって、残留を決めた。最初は1ヶ月だけ残るつもりが、国境封鎖とビザの関係でずるずると延びていき、お盆には絶対帰ると意気込んでいたが、あと2週間、あと3週間と、結局お盆も年越しも帰国しないまま2020年が終わってしまった。田舎の家で育ったので、お盆も年越しも実家で家族と過ごさないのは生まれて初めてだった。

年越しそばも、お雑煮も、初詣も、親戚挨拶も、中高時代からの友人と会うこともない1人の正月。今まで自分の中で無意識にも抛り所としていた習慣を一時停止せざるを得なくなり、自然と1人で過ごす時間が増えた時に、問いが浮かんだ。

自分はどうしてここににいるのか、自分は何のために生きているのか。大学にいた時も似たようなことを毎日考えていたなあ、とふと思ひ出す。授業中でも、ダイニング・ホールでも、ポストカードだらけの寮の

自室でも、深夜2時に追い出される図書館でも、夜友達と一緒に行くパーティーでも。自分は何のために生きているのか。

大学では、ジェンダー学と政治学を専攻した。専攻のきっかけは、大学の1年次に取った人類学の授業で、マルクス主義に対するフェミニスト批判理論を読んだことだ。彼女は、マルクス主義に対して、家事を労働として全く鑑みていない、抑圧されているはずの女性「労働者」が含まれていない理論で真の労働者運動を達成することができないのではないかと疑問を呈した。それを読んだときに私は、今まで感じていた「生きづらさ」を理解するための思考の枠組みと語彙を与えられたような気がして、一目惚れのように、ジェンダー学を専攻することに決めた。

ジェンダー学は当初、自分自身のための解放運動としての側面が強かったが、資本主義や差別など社会構造の基礎になっているイデオロギーを学んでいくうちに、次第に個人の「幸せ」や「生きがい」について考える機会が増えた。同時に政治学も専攻していたので、万人のための理想の社会を実現するためには政治がどういう働きをしたらいいのか、ということにも興味が高かった。

卒業論文は、ジェンダー学と政治



上／ヨハネスブルクの勤務校にて。
下／セメスター・スクールの同僚たちと。

学の交叉としてニューヨークの移民セックスワーカーの労働環境について書いた。どのような政策や法整備がこの産業での労働者の権利を抑圧しているのか、また労働環境やこの産業で働くことが、労働者の自己認識にどのような影響を与えているのか、といった問いを中心に研究を進めた。

3 年次には「デンマークへ留学し、政府がどんな政治思想を軸に政策を作るかによって、社会や個人の福利に異なる影響を与えるのか学んだ。卒論研究のために、大学から研究費をもらい実地調査を行ったり、実際にセックスワークの産業で働いていたことのある方にインタビューしたりした。ウェズリアン大学では、自分の探求心を学びの機会に変えてくれる環境があった。

私のウェズリアン大学での生活を

大きく色付けたもう一つの側面として、教授との交流がある。

大学の4年間のうち、英語が流暢に使えるようになったと感じたのは最後の1年間だけだった。授業の内容がわからないことより、英語で自分を表現できないことや、他者のことを理解して関係を築くことの難しさの方が堪えた。大学では、教授と二人三脚で、1対1の授業を1から作り、履修したのちに単位をもらうことができる。大学1年生の時からお世話になっている英文学の教授とは、このシステムを利用して、さまざまなライティングの授業を作った。彼女はこの授業を通して、私に思いっきり今までの経験を振り返る機会を与えてくれた。

高校生の時に経験した母の死や、主に日本の父権制から派生した学生時代の体験などについて書いたエッセイを通して、自分が大切にしたい価値観とは何なのか、そしてその価値観をどうやって実生活に反映させるのか、という難しい問いを私に投げかけ、辛抱強く寄り添ってくれた。その他にも、仕事のオフアールが来るまでアメリカに留まらざるを得なかった時に家に泊めてくれる教授もいれば、南アフリカで苦しんでいる時に、わざわざアメリカから電話をかけてくれる教授もいた。彼女たち

は、言葉で自分を表現すること、複数の言語で思考すること、そして異国の地に根を張り生活することを教えてくれた。いろいろな人に助けられたからこそ、ウェズリアン大学に行って、学びだけではなく自己についての問いを深めることができた。このコミュニティの強さこそが私の理想の社会に欠かせないものだと思う、自分も人を助けられるような生業を得たいと感じるようになった。

教育機会が私の人生の軌跡を大きく変えたという原体験もあり、社会を変えるためには教育だという確信を持って高校時代からさまざまな活動をしてきた。就職活動時も、世界を「よい」方向に変えられているという実感と、他者との繋がりを得られるようなことをしたいと思い、コンサルや金融などには意地でも応募せず、ジェンダー・政治・教育というテーマに絞って仕事を探した。

私が今経験している「*existential crisis*」(実存的危機)なるものは、この2つの確信―世界を「よい」方向に変えられているという実感と、他者との繋がりを得られるようなこと―が不安に変わってしまったから起きていような気がする。

教育現場に立つ機会をしばらく失い、一時停止を余儀なくされた私は、南アフリカで一人ぼっちで辛い思い

をしている意味がわからなくなってしまったのだ。むき出しの不安と向き合い、今の仕事に本当にやりがいを見出せているのか、自問した。自分が理想とする社会、差別や機会の不平等がなく、一人ひとりが好きなことを思いっきりできる社会を実現するためにできることは何なのか。家族や、友人、自分の文化ルーツをすべてアメリカと日本に残し、本当に南アフリカで、教育に携わることが、自分にとっての最適解なのか。私は答えが見つけられない。

この「自分は何のために生きていくのか」という問いは常に存在している、潮の満ち干きのようにこれから私を翻弄し続けると思う。ただウェズリアン大学で不安だらけで過ごしながらも充実した4年間が今の生活を導いたように、ここからどんな旅路を歩むのか、まだ見えないものへの大きな期待のようなものも感じる。大学時に読んだ、『青鞥』によく寄稿していた与謝野晶子の「自己の生命の表現として自主的にする労働は、その生命を健康にする」という言葉

memo

一念発起をして茨城県の公立高校からアメリカの大学に進学することを決意。留フェロ(P2)の活動を通して教育に従事する楽しさを知る。

百の仕事をする百姓を目指して、 百の視点で物事を見る。

森田 早紀

Morita Saki

オランダ | ヴァンホールラレンシュタイン応用科学大学 農学専攻

埼玉県出身・県立大宮高等学校

「サキとヘンプの木」、
あつという間に
抜かされた！



大学の研究者とはヘンプも栽培した

不思議なものだ。畑に立つたびに、「今の学科は本当に自分が学びたいことだろうか」という疑問が頭をよぎる。しかし大学に戻ればいつも、「やはりこの勉強と私の夢は繋がっているのだ」と気づく。お百姓さんになりたいと、そして日本にとどまるのは嫌だと、オランダの大学一本勝負で挑んだ高3の冬。あつという間に月日がたち、今は大学3年の冬。私の専攻はInternational Business in Food and Flowers、食品と花卉の国際ビジネスに関する学部課程だ。国境を越えたビジネスに重きを置いている。対して私がやりたいことは、地元の農業を地域課題と組み合わせることで興すこと。国際・ビジネスとは少し疎遠に感じることもある。それでもこの学科から学ぶことは沢山あるだろう、持続可能性や生産性に力を入れた農業、農福連携の仕組みも

あり、英語も通じるオランダで学ぶことは大きな価値があるだろうと思いい、異国の地へと旅立った。私が通う応用科学大学は理論の応用を重視している。グループで取り組むレポート課題が多いため、自分の興味を講義の内容に結びつける機会は十分にあった。例えば入学後初めてのグループ課題、好きな食品のサプライチェーンを調べるといいうものでは、オランダではまだ珍しい海藻に着目した。3〜4学期と2年2学期の課題でも、グループを説得して何かしら海藻の要素を取り入れた。とりわけ海藻マニアであったわけではないけれども。園芸の講義では、農業だけに頼らない「総合病害虫管理」を学んでいた。その一つの方法が益虫を使うこと。担当の先生は、益虫を売る会社

に勤務していたことがあったため、とても詳しく教えてくれた。私たちの使う温室でアブラムシが発生した時には、実際に寄生コバチを放った。もちろんビジネス学科として導入費用と効果も考えながら。導入が遅れたためかアブラムシの繁殖は止まらなかったが、最終的にはスーパード買うような大きなレタスが収穫でき、水でよく洗って食べた思い出がある。園芸の授業にゲスト講師としてお話してくれた大学所属の研究者mさんがいる。喫茶店から使用済みのコーヒーカすを取り寄せ、キノコの培地として使い、その後はミミズの力で堆肥にするという研究をしている。後日、先生からmさんの研究に参加したい人はいないかと連絡があり、やってみて損はないと手を挙げた。それが2021年の今にまで影響を及ぼすとは知らずに。2019年の春には、例のミミズ堆肥の効果を調べるために、実験地にミミズ堆肥・バークキュライト・落ち葉堆肥を施し、ヘンプ(麻)を育てた。土の比較に加えてヘンプの生育実験もしたかったそうだが。夏の間、私は企業研修でヘンプの様子を見に行けなかったため、晩夏に戻ってきた。私の背の2倍ほどの丈に成長していた。実験レポートを書くように頼ま



図芸クラスの実習では温室でレタスを栽培した。

たら、ぜひ連携したいと興奮気味に返事がきた。私の将来の夢にも社会的企業の要素が含まれているのでワクワクする。連携は夢ではないかもしれない、その理由は…。

3年前期のグループ課題は、実在する問題の解決策を見つけること。私のグループは、例の日本の社会的企業のAさんに連絡を取った。すると日本の社会的企業の進む道を海外の視点から考えてくださいと頼まれた。日本のためにお願いします、と。

国外から見ると、外国人にとっては驚くことが日本にはたくさんある。なぜ投票率が低いのか、なぜストレスだらけなのか。グループの仲間から聞かれて答えに戸惑った。20週間の調べ物や議論の末に完成したレポート。ただの読み物では終わらせず、一部でもいいから実現させたい。卒業後の私のやることリストに書き足した。

それ、お札にヘンプの種を頂いた。翌年の春先に再び連絡があり、今度はクコの実とインゲン豆を育てたいとか。実験地の端には好きなものを植えていいと言われ、ゴーヤと大豆の種を蒔いた。どちらもオランダの氣候に耐えられなかったのか消滅してしまっただが。秋に収穫した豆はすべてどうぞと渡され、美味しくいただいた。クコの実の方は、結局数粒しかなかった。

そして2020年の冬。翌年2月からの企業研修の受け入れ先探しに四苦八苦していた私のもとに、Mさんから連絡が。ミミズ堆肥のスタートアップ企業が、事業拡大計画書を作れる人を探しているという。企業に連絡を取ると話は滞りなく進み、この原稿を書いている今は、2週間後に研修初日を控えている。

この企業は障がい者の働く場所も生み出していて、日本のミミズ堆肥や障がい者雇用の現状を聞かれた。私の地元にある社会的企業の話をし

や30世帯を養う予定の食べる森と菜園も見せてもらった。

肉体労働と興奮で疲れてぐっすり眠れた1週間。創始者と話す機会もいただき、こんな地域密着型のプロジェクトにも、資金繰りや組織運営などビジネスとして考えなければいけない面があると気づいた。

その後3週間滞在したのは、ドイツとの国境近くでバーマカルチャーを営む農園。到着した日はなんとお祭りの前日で、忙しい時にお邪魔してしまったのだと申し訳なくなった。しかし「来てくれてありがとう、助っ人が増えたよ」と歓迎してくれた。

滞在中は畑仕事だけでなく、人との会話がとても楽しく印象に残った。オランダの生産性重視の農業や食品産業が、農家や購買者、自然に及ぼす影響についての話になった時には、オランダ農業を単なる憧れの目だけではなく、そのひずみや限界を見られるようになった。木陰で休

み、淹れたてのミントティーを飲みながら、私が勉強している国際ビジネスという分野には意味があるのだろうか、と考えたりもした。

こんな夏休みが明けた後にあったのが、例の地元の社会的企業との連携課題及びミミズ堆肥の企業とのご縁。加えて「大企業の経営管理」と題しながらも、小ささまざまな組織に当てはまる理論が盛りだくさんの講座。学んだ理論を自分の夢にどう繋げるかは自分次第。学べば学ぶほど、経験すればするほど、世界を見る道具が増えるように感じる。

国際ビジネスを学んだからこそ持てた目。日本を外国の視点から、畑や地域を集団力学や社会への影響という観点から、オランダ農業の限界を知った目から。これらをもって自分の進む道を考え確立できる。百の仕事をごなす百姓を目指し、百の視点で物事を見られるようになるべく、種を蒔いていく。



エコビレッジに滞在して大工仕事を手伝う。

memo

埼玉県主催の事業で訪れたハーバードでの経験や「百姓」という道を選んだことから、海外での学びを選択。JASSOの海外留学支援制度に採用されオランダに留学中。

何のために大学で 学んでいるのだろう？

高島 凌輔

Takashima Ryosuke

アメリカ | ハーバード大学 環境エネルギー工学専攻・公共政策副専攻

大阪府出身・私立灘高等学校

エネルギー変革を起こす
世界のうねりを実感！



海外視察、オランダにて。

朝の光を浴びたチャールズ川を眺めながら、大学2年生の私はぼんやり考えていました。初めての海外生活がスタートして早2年。少しずつ英語に慣れてきて、少しずつハーバードがわかってきて、ふと自分が大学にいる目的が不明瞭だと気づいたのです。その日の朝は、私がスポーツ写真の部長を務める学生新聞・Harvard Crimsonの取材でポート部の写真撮影。まっすぐに水面を切るボートの軌跡を眺めながら、このままずっと卒業してしまうのではないかと、ふと怖くなりました。

思い返せば、初めての海外生活は苦難の連続でした。最初の授業で高速ディスプレイがまったく理解できず、授業後に教授に相談した時のこと。エネルギーの期末試験前、同級生が試験範囲を一から一緒に見直してくれた時のこと。体調を崩して寝込んでいた時に、寮の友達がメッセージ付きでテスト範囲のまとめシートを届けてくれた時のこと。もがきながら前に進んでいた1年目と比べると、2年目は異国での学びに良くも悪くも慣れていました。次から次へと訪れる予定と課題をこなし続けるだけで、4年が過ぎてしまふのは怖い。何より、自分は本当にエネルギーに興味があるのか。

エネルギーを最初に学びたいと思ったのは、福島に行ったことがきっかけでした。震災から1年後の2012年に訪れて以来、高校の生徒会の仲間とともに何度も足を運びました。女川原発で安全停止に至った理由を伺い、福島第一原発事故で大きな被害を受けた牧場主の方や事故対応を続けた市長に当時の状況を事細かに教えていただきました。そして、ふるさとのために活動する同級生と出会いました。今までニュー

スの中の場所だった「福島」が、「友達達の〇〇が住んでいる福島」になりました。

高校2年生まで理系だった私は、3年生で文転。模擬国連の世界大会に出場するなど国際政治に興味を持ったためでしたが、好きな教科は数学や生物など理系分野でした。将来は理系の知識やスキルを活かして政策決定の仕事をしたと、学際性が高く文理融合の学問が学べるアメリカの大学進学を決めました。「環境政策」という専攻があり、大学院の授業も自由に選択できるハーバードは、自分の学びを自由にデザインできるという観点でとても魅力的でした。

大学で専攻を宣言するのは2年生の秋。当初は初志を貫き環境政策を宣言しようと思っていた私が、環境エネルギー工学専攻に再理転したのは、ハーバードの公共政策大学院生とともに訪れた福島第一原発での経験がきっかけでした。

実際に原発の敷地内に入り、東京電力の責任者をはじめ現地の自治体

memo
高校卒業まで日本で生まれ育つ。高2の冬に灘校の先輩に勧められハーバードを見学したことを機に海外進学を決意。ハーバードの奨学金を獲得し、東大に半年通った後に渡米。留フェロ(P2)代表理事。

首長、避難生活を送られている方とお話する中で、エネルギーはいくつもの人生の基盤だと実感。自然エネルギーをテーマにすることを決めました。ただ、エネルギー政策を立案するにはエネルギーに関する高度な専門知識が必要です。だからこそ、まずは工学部でエネルギーの仕組みを学び、そこで得た視点を軸に政策を創り上げたいと環境エネルギー工学専攻を宣言したのでした。

しかし2年生が終わろうとする4月になって、エネルギーというテーマが急に自分から遠くなった気がしました。エネルギーについて学ぶのは面白いけれど、大学での学びがどのように社会に繋がっているのか、そもそも自分は何のために大学で学んでいるのか、自信がなくなりました。

そんな時に思い出したのが福島訪問でした。現場経験が自分の学びの後押しになっていることを実感し、1年間かけて国内外のエネルギーの現場をめぐるかと決意しました。ちやうど募集があった孫正義育英財団の選考を通過して支援を約束したとき、大学に休学を申請しました。

休学時の大きなテーマは、日本のエネルギーの50年後の未来を見出すこと。アウトプットする現場として日本を定め、国内ではエネルギー変革のボトルネックを見出し、国外で

は日本に活かせる先進的な地域を視察して回りました。50年後にエネルギーはどのようにつくられ、使われているのか。新たなシステムを社会実装する上で、アカデミアの研究政策、ビジネスの3つの視点は常に欠かせません。この3分野をバランス良く視察取材することで、アウトプットを意識した現場での学びを実現していきました。

最初の半年は日本国内でのインターシップと取材。新型の風力発電を開発しているベンチャー企業の株式会社チャレナジーや、エネルギー外交を所管する外務省経済安全保障課でのインターシップを通じて、エネルギーをテーマに課題解決を行う感覚を身につけました。東京大学や東京工業大学をはじめさまざまな分野の研究者の方や、経済産業大臣や元知事といった政策・行政の専門家、そしてベンチャー企業から大企業まで多くの方々取材することを通して、日本のエネルギー変革のボトルネックは送配電にあると確信しました。

それは、せっかく自然エネルギー由来の発電を増やしても、送配電網が火力発電由来の電力を優先していると消費者まで届かないからです。大規模一括発電時代の送配電網は、大電力会社が日本の隅々まで電気を

送ることに適していますが、地域分散型発電には適していません。自分たちで使う電気を自分たちで選び、地域の生活様式に適した電力網を築くことが求められているのです。

その後、ドイツ、デンマーク、オランダ、アイスランドなど、さまざまなヨーロッパの現場を回り、どのように自然エネルギーを導入してきたのか、どのように市民が受け入れてきたのかを現地での生の声を聞きながら学びました。

さまざまな分野の専門家の方々と議論する中でも、日本と何が異なり、どんな知見なら生かせるのかを考え続けたことで、インタープットの質が上がりました。何より、欧州の専門家が日本の状況に興味を抱いてくれ、具体的なアドバイスを受けられたことも幸運でした。この姿勢は大学に復学しても変わりません。授業中も日本でのアウトプットを意識しながら学ぶことで、より主体的に一つひとつの授業に向き合っている気がし

ます。授業での学びが、日常生活の改善に繋がっている。これを実感するだけで学問へのモチベーションが上がります。自分に何が足りず、何をさらに学ぶべきかのヒントを現場からもらっていると言えるかもしれません。

現在は、卒業論文のテーマを「都市における自然エネルギーを軸とした自立電力網の形成」とし、兵庫県芦屋市をフィールドに提言形式の論文を書くかと考えています。芦屋市は高級住宅街として有名ですが、無電柱化率は日本トップレベルであり、エネルギーを自給する日本初のスマートシティも有するエネルギー先進地です。2019年秋には芦屋市役所でインターシップを行うなど、準備に励んでいるところです。

チャールズ川に佇んでから3年。あの時の問いの答えがようやく見えてきました。自分は日本でエネルギー変革を起こすために大学で学んでいるのだと。

上／大学ではラグビー部に所属。
下／ハーバード大学のエリオット寮にて。



び レシピ

Social Inequalities: American Cultures

定性と定量のアプローチからアメリカの格差について学ぶ授業。フィールドワークやインタビューなどを通じて、格差の内情や格差のトリガーとなる事象に対して理解を深めることは、自分が経験した格差を学術的に理解することに役立った。フィールドワークやインタビューの他にも、多様なバックグラウンドを持つ学生との議論を通じて、大学での学びは座学だけではないと実感した。

Consumer Behavior

消費者心理・行動について学ぶ授業。実際のケーススタディを通じて、消費者がどのように情報を処理し、態度や判断を形成し、意思決定を行う方法について学んだ。この授業を通じて社会学とビジネス理論の関係性を見出すことができ、これをきっかけに社会学のビジネス面での応用に興味を持つようになった。

Marketing

マーケティングについて学ぶ授業。マーケティング理論からだけでなく、ケーススタディやマーケティング分野で働くゲストスピーカーの話を通じて消費者心理を意識しながら

らマーケティングについて学んだ。授業の集大成として実際に存在する企業のマーケティング戦略を考案し提案することで、効果的なマーケティングを行うだけでなく、持続性やリスクヘッジなど組織運営の観点も交えながらマーケティング戦略について学ぶことができた。

Organizational Strategy and Design: A Sociological Perspectives

さまざまな組織エンティティの組織設計戦略とデザインについて学ぶ授業。国際的な問題、組織設計における重要な議論、およびそれが組織にもたらす影響について学んだ。組織内部についての理解を深められ、戦略を策定するためには組織外部がもたらす影響を理解することが重要であることをあらためて感じた。

グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップ

主体的に学びをデザインし続ける力を育み、世界の課題に向き合う人材を育成することを理念に掲げる NPO 法人。日本全国の教育機関を訪問する中高生向けのプログラムや合宿形式の教員向けのプログラムなどがある。ここでの運営に関わる経験が、社会学以外の幅広い学びに興味を持つきっかけとなった。

Analog Electronics Lab

アナログ回路の実習ベースの入門授業。学期後半の自由製作では電子ピアノやミニセグウェイ、シンセサイザーなど、思い思いの作品を一から作った。週に25時間ほどを実習に費やし、ハードウェア実習の基本、デバッグの方法や勘を学んだ。

Nanoelectronics and Computing Systems

半導体物理の授業で、トランジスタ等の物理的な仕組みや、最先端のナノファブリケーション(製造)技術やその課題について学ぶ。授業の最後には企業でもよく使われるソフトウェアを使用してトランジスタをチームでデザインした。回路設計の上で必要な半導体物理や最新の製造技術を幅広く学べた。

Analysis and Design of Digital Integrated Circuits

大学院レベルのデジタル回路の授業で、毎週の理論と設計の両方の課題が出される。中間プロジェクトではハードウェアセキュリティ、最終プロジェクトではApproximate

Computing(概算)に関する論文レビューとペアでの設計を行った。デジタル設計の基礎について経験を通して学んだ。

Gender and Japanese Pop Culture

日本のポップカルチャーを通してジェンダーについて考える、人類学とジェンダー学の入門授業。提携校との単位互換制度を利用して、ハーバード大学の大学院生や、女子大のウェルズリー大学の学生も受けに来ていた。日本の地方都市でいわゆる理系女子として生きてきた自分にとって、自分を色々な意味で自由にしてくれた授業だった。

Undergraduate Research Opportunities Program (UROP)

学部生向けの研究プログラム。私は3年間かけて超伝導素材を使った単一光子を検知するデバイスの研究を行い、共同第一著者として学会誌への論文投稿まで行った。世界の最先端の研究に早くから触れられ、学部生であっても学会発表、論文、スタートアップなどを行うことも少なくない。研究やものづくりの楽しさを改めて感じた。

01

幸田優衣

カリフォルニア大学バークレー校 社会学専攻

02

森本優貴美

マサチューセッツ工科大学 電子工学専攻

Cognitive Neuroscience

脳の分野や神経伝達物質の働きに止まらず、進化論と神経学の整合性、認知神経科学領域での倫理論争、動物実験結果のヒトへの応用の妥当性など、多岐にわたるトピックを網羅しました。特に印象に残っているのは、還元主義に陥ることなく、多面的に事象を解釈することの重要性です。美しい理論はシンプルであることが必要とされる一方で、事象を過度に簡略化しては、正確な判断を下しかねます。この複雑系の考え方は、認知神経科学以外の多くの分野でも応用が利く考え方で、今では「目の前のものをそのままの形で理解しない」ことを自身の座右の銘に掲げています。

Government and Social Change

民主主義の台頭と社会運動の事例を通して政治学の分析における基礎を学ぶ授業。ちょうどこの授業を受講した時期に、滞在先のアルゼンチンでは中絶の承認をうたう社会運動がピークを迎えており、デモの日には数千人の女性たちが国会議事堂に向かって一斉にスローガンを叫ぶ姿を目の当たりにしました。社会階層も年代も異なる市民を結束させた様々な要因を実際に分析する機会に恵まれたことで、より臨場感が高く、記憶に残る学びに繋がりました。

Civil Rights Movement in American History

公民権運動に関する授業。学生非暴力調整委員会(SNCC)の学生活動家や黒人女性など、普段語られることの少ない担い手の視点から運動を学んだ。農村部における有権者登録運動や教育プログラムの提供、キング牧師のような教会指導者と学生活動家間における軋轢などを細かく学んだ。当時のインタビュー記事や活動家の自伝など主に一次資料を扱った。

Black Lives Matter

ブラック・ライブズ・マターに関する授業。公民権運動以降にも依然残り続けている経済格差や公立学校の人種分離、大量投獄、麻薬戦争、警官などの公権力による暴力や取締りなど、制度的人種差別を広く扱った。目に見える形の差別ではなく、システムや制度に組み込まれた差別の現状を分析した。

Theories of Cognition and Emotion

「認知」と「感情」にまつわる理論について、心理学・哲学・人工知能など、あらゆる分野の解釈を越境しながら学ぶコース。中でも特に興味深かったのが、順序だった問題の分解ができない時の問題解決法と感情の個人間での違いです。前者は、私が1年次に取り組んでいた「なぜ大企業はイノベーションを起こしづらいのか」というテーマに直結する論理で、これから新しい価値を創り出そうとする上で念頭に置くべきことを体系立てて学ぶ良い機会になりました。後者は、負の感情を感じるしきい値や感情の頂点、回復にかかる時間などに個人間で差があることを改めて学び、より良好な他者・自己との関係の構築に応用しています。

Personal Motivation and Social Motivation

モチベーションの変容や行動変革を促す要因や、人を説得するのに効果的な戦略と、それらの戦略を執行する際の注意点に関して学ぶ授業。中でもリーダーシップについて論じた回では、男性による交渉は自信の現れとして好意的に取られるのに対し、女性が交渉の場に立つと奥ゆかしい女性に対する理想像との不一致から、自己主張が強く協調性に欠けると評価される傾向があると習いました。自分と相手のニーズだけではなく、無意識にかかるバイアスにも配慮して交渉を進める工夫は、実際に給与交渉を行う場でも役立っています。

Civil War / Reconstruction: 1848-77

南部諸州の連邦政府脱退から南北戦争勃発、アメリカ再建期に関する授業。奴隷制の廃止有無を争点に分裂した北部と南部、武力衝突を避けようと試みた様々な妥協や政策、終戦後の合衆国憲法の修正、軍隊の駐留による強硬手段を取った再建期、そして連邦軍の撤退と同時に幕を開けた黒人差別政策や南部の伝統的な政治家の時代など、アメリカ合衆国の根幹を最も揺るがした時代の一つを時系列に追って学んだ。

African American History from Slavery to 1877

アメリカにおける黒人奴隷制度に関する授業。大西洋奴隷貿易や綿花を中心としたプランテーション、奴隷州と自由州の違い、黒人奴隷の反乱など、約250年間続いた奴隷制度時代を広く扱った。ニューヨーク州北西部は南部奴隷が自由の身分を求めて北部に逃亡した地下鉄道の主要拠点であったため、大学付近で奴隷の隠れ家として奴隷解放に尽力した家や子孫の方々から実際に学ぶ機会もあった。

03

片山晴菜

ミネルバ大学 経営学・認知科学専攻

04

坂内佑太郎

ニューヨーク州立大学 黒人史専攻

Imagining the Exotic in Western Music

新入生必修セミナーのためランダムに配属された音楽学のクラス。教授のオフィスアワーに足繁く通い、留学生としていけるか不安のあったライティングや授業内発表への自信をつけることができた。1930年代の日本の中国オリエンタリズムを論じた12,000語超の期末論文では、新入生全員が対象のエッセイコンテストで最優秀賞を受賞した。

History of Economic Thought

専攻のカリキュラムの中では変わり種だった経済思想史のクラス。課題は毎回レポート提出、成績も在学中最低のB-評価に終わったハードな内容だったが、シカゴ学派の研究で博士号を持つ教授との高度な議論を楽しんだ、まさにリベラルアーツという授業だった。初期の経済学者のように、移りゆく人々の生活から理論を導き出し定量的に表現することは自分のジャーナリズム観に近いものがあり、経済学を学ぶことの意義を再確認した。

Solutions Journalism

出来事の5W1Hを報じて終わるのではなく、その背景や事例比較などを通じて社会問題の解決を目指す新しい報道のあり方「課題解決型ジャーナリズム」を学んだ。教授は南部の非営利メディアで黒人差別を報じてきたベテランのジャーナリストで、授業内でも理論より実践に重きが置か

れていた。8人のクラスメイトとともに学内の飲酒事故の報道プロジェクトに参加し、学生と大学当局の対話を促した。

Chinese Media, Global Context

1年次の終わりに自主的に参加した北京大学とロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の連携サマースクール。教室にも監視カメラ完備の北京で、LSEの教授から中国のメディアについて学ぶという体験をした。報道は全て共産党支配下にあり、「報道の自由度ランキング」最下位クラスの中国だが、中央と地方の対立や、市民に支持される調査報道など、実は複雑なメディア構造があると知った。授業内で訪れたテンセントの事業所ではニュース執筆AIの力を目の当たりにし、テクノロジーの報道への影響に関心が高まった。

Supervised Internship

単位互換インターンシップ制度を活用し、3年次の秋学期をマレーシアで過ごした。東南アジアで最も先進的な独立ニュースサイトであるマレーシアキニにて、データ報道部門のインターンとして本業のデータを使った分析記事を書く傍ら、購読者向けサービスのウェブ開発、日本人死刑囚の家族といった言語スキルを生かした取材・記者会見の写真撮影など幅広く活動した。社会自体が急激に変化する新興国で、次世代のメディア作りを本当に楽しんだ3ヶ月だった。

Ethics of Embodiment

ジェンダー学を専攻する学生の必修授業。アメリカのフェミニズムに関する理論を中心に歴史学、社会学、哲学の観点から、アイデンティティを体現すること、そしてその政治性についての議論を重ねる。フェミニスト理論や歴史上の出来事が詰め込まれた授業で、ジェンダー学の他の授業を取るときに欠かせない基盤となった。

Sex Work

社会学的観点から、セックスワークとは何か、産業に携わっている人たちの生活や経験などを書いたエスノグラフィーの読解を中心に、政策や法整備から倫理的道義まで複数の視点から包括的にディスカッションを行った。ジェンダーに関して哲学やアイデンティティの面から考えるだけではなく、ジェンダーとセクシュアリティの政治性について考えるきっかけをくれた。

Environmental Policies

デンマーク留学時に取った授業。授業の内容自体は環境問題に特化しているが、アクティビズムの在り方や、社会運動の戦略を実践的に学ぶことができた授業。グリーンピースコペンハーゲン支部のストラテジストと、元デンマーク環境省のEUロビイストが教鞭をとり、構造内と構造外からどのように社会運動を推し進めていくか自身の体験談を交えなが

ら教えてくれた。グリーンピースへの戦略提案が最終課題として出され、私は生理用品会社への抗議活動を計画した。

Japanese Women's Writing

日本の女性作家の文学を通して、日本の歴史と社会構造について学ぶ授業。ジェンダーの問題はもちろん、沖縄、公害、在日差別、東日本大震災等を扱った作品を読み、被抑圧者の視点から描かれる日本について学ぶ。卒業間近の最終年に取り、自分が日本で育った中でどんな価値観やイデオロギーを内在化させているのか考えるきっかけになった。

Nuclear Disasters in Japan

東日本大震災時に起こった福島第一原発事故と広島・長崎への原爆投下を学ぶことを通して、原子力政策がどのように日本とアメリカの関係を形作っているのか学ぶ授業。歴史学の教授とアーティストが共同で教える授業で、政府資料、当時の新聞記事、文学作品、映画等から毎週300ページ超のリーディングが課されるかなりきつい授業だった。ディスカッションやライティングはもちろんのこと、ダンスやムーブメントを通して、原子力や戦争について学ぶ授業だったので、精神的にもかなり身を投じ、原子力への絶対反対姿勢、「原爆が戦争の終焉を招いた」というアメリカの解釈の拒絶や太平洋戦争を経験した祖母への思いが強烈に芽生えた授業だった。

Manage a Large Scale Company – Performing as manager

ゲーム形式で大企業の意思決定プロセスを学んだ。4人1組で役員会を作り、それぞれがCEO・CFO・CMO・CPOの役割を担って他のチームと競う。架空の市場で商品を売って利益を得るために、商品価格や広告費・生産量や原料の注文・配当金等の数値を決めると、ソフトウェアが処理して結果を出してくれる。2期目に支払い停止という危うい状況にも陥ったが無事復帰することができ、計8期の末には1位で終わることができた。役割分担や意思疎通プロセス、結果分析の特訓にもなった。

Manage a Large Scale Company – Management and organization

組織の構造や意思決定、リーダーシップの理論を学び、事例研究やインタビューで応用した。インタビューは2人1組で行い、私とペアの人はオランダのある社会的企業の社長にお話を伺った。利益を社会的な影響を及ぼすための道具として使う企業の、競争相手や事業拡大に関する価値観を聞いたのは貴重だ。心に残ったのは、「他企業は競争相手ではなく共創相手」ということ。

Entrepreneurship and Innovation – Setting up a sustainable business

1、2年生の終わりには毎年、ビジネスフェアがある。そこで発表する企画を練る場としてこの講座があった。マーケティングや資金繰りの理論を学び、グループ課題で応用。私のグループは、オランダではまだ目新しいお年寄り向けのスーパの開発を行った。フェアには先生や学生だけでなく、審査員としてスーパのマーケティング担当者や銀行関係の方も来て、緊張感のある、けれども楽しい1日だった。

International trade – International buying and selling

国際貿易に関して、契約の結び方や流通について学んだ。校外学習としてロッテルダム港を訪れ、輸入果物を専門に扱う会社の倉庫見学をしたり、貨物の積み降ろしが行われる立入制限区域をバスの中から眺めたりした。私自身は将来このような仕事をするのではないだろうけれど、日常生活を支える貿易を間近に見られ、その莫大な規模に圧倒された。

Earth Resources and the Environment

エネルギー基礎の授業。エネルギー源の採掘から利活用、環境への影響まで幅広く扱う。シミュレーション・ソフトを用いた実験演習が毎週あり、2泊3日のフィールドワークでは炭鉱やシェールガスの現場を視察した。教授はもとも民間出身でエネルギー界に精通している。この授業を通して環境エネルギー工学と実社会の接続を痛感したことが、後の休学に繋がった。

Energy Technology

工学大学院にて開講。「2055年までに米国のCO2排出量を半減せよ」という最終課題では、発電・工業・家庭など米国社会の様々なセクターのデータを扱い、公衆衛生学の博士課程、建築大学院の修士課程の学生とともに、米国が今後進むべき方向性を提言した。復学後の最初の授業であり、異分野を学ぶ学生との共同プロジェクトこそが大学の醍醐味であり価値だと実感できた。

Economics of Climate Change and Environmental Policy

公共政策大学院と共同開講している環境経済学入門の授業。過去に米国環境保護庁環境経済学の諮問委員会座長を務めた教授が京都議定書・パリ協定等において米国が取ったスタンスの理由を裏側まで解説してくれた。副専

攻を公共政策にする決定打になった授業で、改めてエネルギーの分野で社会を変えるには政策の後押しが不可欠だと実感した。

Japan's 2011 Disasters and Their After math: A Workshop on Digital Research

人類学、歴史学の観点から東日本大震災を見つめ直すという意欲的な授業。大学院生5名、学部生4名に3名の教授がつく超少人数制。国外のためフィールドワークに行けない分、SNSやデジタル・アーカイブを活用しつつ、日本から多くのゲストを招いて現場の声を拾いながら震災の歴史を紐解いた。学期を通して自分のプロジェクトを行い、私は原発事故で放射能汚染された水田を自分たちで除染した米農家にインタビューしつつ、安心と安全の差という視点から風評被害について分析した。

Semester Off - Fieldwork on energy

ハーバードの大学院生とともに春休みに訪れた福島第一原発がきっかけで、環境エネルギー工学専攻を決め、休学中にも多くの現場を訪れた。エネルギーについて学ぶことは社会の駆動する仕組みを学ぶことでもあり、世界中の現場から日本に活かせる点を見出す2年間は、大学時代の学びをより深める意味でもモチベーションを高める意味でも非常に有意義だった。

京セラ・KDDI、JALグループを哲学経営で率いてきた稲盛和夫氏。
このシリーズでは、社員や経営幹部の皆さんが稲盛哲学をどのように咀嚼し、
自分のものとしているのか、仕事での実践についてお話を聞きます。
今回は、大阪を本拠地として全国に13の事業所を展開する株式会社宮田運輸の
宮田博文社長に「利他の心」による企業経営について語ってもらいました。

マイフィロソフィ

「利他の心」は現場にある

株式会社宮田運輸代表取締役
宮田博文さん



2012年、42歳の時に4代目の代表取締役就任し、社員数も業績も順調に伸びている矢先に自社のトラックで事故が起きました。運送業を天職だと思っていた宮田さんは、自分が好きなトラックが深い悲しみを招いたことに苦悩します。

苦しみの中、盛和塾とともに学ぶ塾生たちが宮田さんの心を受け止めてくれました。ある塾生の方から「トラックをもっと活かす方法があるのではないか」という言葉をもらいます。しばらくして、鋼材加工の会社で従業員の子どもが描いた絵とメッセージを安全標語にしていると聞き、会社を訪問します。

子どもたちの絵と「お父さん今日も安全に帰ってきてな」というメッセージは、働く社員の心に直接響きます。宮田さんは「これだ!」と思い、子どもたちの絵とメッセージをトラックの外側にラッピングすること、日本で、世界中から事故をなく

そう」という願いを、社内の

運転士だけでなく、より多くの人たちに伝えたいと考えました。「子どもミュージアムプロジェクト」の始まりです。

そこから、人にはもともと「利他の心」があり、それを使う存分發揮できる会社にすることを決意します。宮田さんは、社員が「利他の心」を發揮できる企業は、日々の仕事の中で「自分は人や世の役に立っている」というやりがい社員に与え、それが幸福感に繋がる。そして自ずと売り上げや利益がついてくると考えます。

現場の「利他」を共有する

現在は、「利他の心」に基づく社員の行動を「宮田のフィロソフィ」として、動画で共有する取り組みに力を入れています。「フィロソフィは現場にある」という観点から、現場で起こっている利他の心を見つけてピックアップし、なぜそれを本人が行動に移したのかを尋ねます。その行動に対して、私が何がよかったのかをコメントする。『宮田運輸はこういうことを大事にし

ているんだ」とわかっていただけです。

取り上げられた現場ではモチベーションがアップ。また、現場の選定にあたって社員の「利他の行動」を探そうとすることが、「社員のいいところを見つけよう」というあたたかい雰囲気をつくることにも繋がっています。

宮田運輸のこれから

「利他の心」を大切にする経営をする中で、自分の心を基準に能動的に行動する社員が増えてきている実感があると言います。宮田社長は、利他の心が経営を越え、世界や未来の幸せを実現する鍵を握ると考えています。

「今こんな時期ですけども、経営を越えて利他の心で人類みんなが繋がっていくかなくてはいけません。人間が本来それぞれ持っているはずの純粋な心を發揮できるような会社や社会をつくっていきたい。社内だけではなく、社会の皆さんと一緒に、未来に生きる子どもたちも一緒に輪になっていければ、そんなイメージを持っています。」



編集後記 | 本号では、NPO法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップの協力を得て、海外大学へチャレンジした日本の若者たちに、自身の主体的な進路開拓と社会に対する取り組みについて書いてもらいました。学問的な好奇心や社会への向き合い方を深く掘り下げる姿には、オンリーワンの進路を創り出すヒントが詰まっています。

RITA LABO は、稲盛経営哲学研究センターの教育実践研究部門として、利他の心を軸に、教育の未来を切り拓きます。

利他ラボ
RITA LABO

<http://www.ritalabo.jp>



お問い合わせ: contact@ritalabo.jp

facebook

rita labo 検索

発行: 立命館大学 OIC総合研究機構 稲盛経営哲学研究センター RITA LABO(リタラボ) 大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学 大阪いばらきキャンパス

編集人: 金井文宏 制作: 大迫力 編集・取材: 梶原千歳 デザイン: 坂本佳子、齋藤直巳 印刷: アート印刷株式会社 2021年3月31日発行